

へあとがき

平成十五年三月をもって、岩瀬博教授が定年を迎えられます。(ただし大学院は引き続き担当なされます)先生は私が初めてお目にかかった十五年前から、ほとんどお変わりになっていません。とてもお元気ですし、御自身の研究に向かう意欲も学生の指導に対する熱意も、いささかの衰えも見せておりません。まだまだ現役でいて欲しいと思うのですが、どうにも致し方ありません。先生は昭和四十六年に本学に助教授として赴任なされて以来、三十二年の長きにわたって在職され、その間に二度学科長も勤められました。大谷女子大学国文学科(日本語日本文学科)を代表する「顔」でいらっしやったわけです。先生は教務部長・文学部長という要職にも長らく就いておられたので、大谷女子大学を代表する、と言うべきかもしれませんが、私達にとってはあくまで国文の岩瀬先生です。

先生の研究分野は広く、中世文学のほぼ全域を覆っていらっしやいます。『平家物語』を初めとする軍記物語、幸若舞曲を中心とする語り物、御伽草子、説話、……。さらに日本の各地をフィールドとした昔話研究、この調査旅行に同行して先生の学問に直接触れた卒業生の方々も多いことでしょう。現在本学科の正規の開講科目「フィールドワーク」の先鞭を着けられたのは、間違いなく岩瀬先生でした。

高崎正秀博士記念賞を受賞された先生の名著『伝承文芸の研究―口語りと語り物』が出版されたのは平成二年のことでした。その後の先生は激変期の本学のために、極めて長く重い時間を費やしてこられました。このたび退休なされて、次なる御著書をまとめる閑暇が得られたならば、我々大谷女子大学日本語日本文学会会員にとどまらず、日本の国文学界にとって慶賀すべきことでしょう。先生の御自愛とさらなる御活躍を会員の皆様と共に祈りたいと思います。